ヤングアダルト通信

VOL.134号（2016.3）
（発行:碧南市民図書館 0566-41-0894）

出会いと別れ

春。卒業、進級、進学 etc.…。
「別れ」と「出会い」の季節ですね。今回のヤングアダルト通信は、学校生活をメインに、別れと出会いについて書かれた本をご紹介します。

『卒業』

小林 深雪／ほか著　講談社（YF ソ）

卒業証書の数だけ、物語がある。
小林深雪、石川宏千花、河合二湖、如月かずさ、福田隆浩。５人の作家が「卒業」をテーマに描く、ヤングアダルト世代におくるアンソロジー。

『旅立ち。』

あさの あつこ／ほか著　メディアファクトリー（YBF タ）

学校に、宝物に、忘れられない記憶に…。大切な何かにさよならを告げて旅立つ日、「卒業」。
そんな「卒業」をテーマに、あさのあつこをはじめ青春小説の名手が、さまざまな瞬間を切り取った１０の物語をつむぐ。

『18きっぷ』

朝日新聞社、朝井 リョウ／著　朝日新聞出版（Y371 ジ）

迷い、いらだち、そして期待…。未来行きの切符を持って、１８歳たちは旅立った。
高校を卒業し、人生の岐路（きろ）を迎える１８歳の若者たちを撮影したモノクロのポートレート写真と、彼らの声を書きとめた。

『リボン』
草野 たき／著　ポプラ社（YF ク）

「先輩、リボンくださぁ～い」。 卓球部女子には、卒業式に先輩から制服のリボンをもらう伝統がある。試合に勝てず、彼氏もいない先輩に、なぜかリボンをもらえなかった主人公。「波風を立てないこと」をモットーに生きてきた彼女の中で今、何かが変わりつつある…。
卒業式から卒業式まで。移りゆく１５歳の気持ちを描いたリアルな物語。

『なりたて中学生』
ひこ 田中／著　講談社（YF ヒ）

すべての小学６年生に告ぐ。中学校はこわくない！ひとつ隣の学区に引っ越したばかりに、周りに知っている友だちがゼロのヘタレ新中学生が主人公。
「小学生が中学生になる」という、だれもが通過した時期のドキドキに共感できる！

『クラスメイツ』
森 絵都／著　偕成社（YF モ）

中学１年生２４人のクラスメイトひとりひとりを主人公にした、２４のストーリー。うれしい出会い、ささいなきっかけの仲たがい、初めての恋のときめき、仲間はずれの不安、自意識過剰の恥ずかしさ、通じあった気持ちのあたたかさ…。子どもじゃないけど大人でもない、そんな特別な時間の中にいる中学生たちの１年間。

『アラスカを追いかけて』
ジョン・グリーン／著　白水社（Y933 ア）

本好きの美少女・アラスカとの出会いが、ぼくたちの高校生活を変えてしまった。突然姿を消してしまった彼女を追いかけて、ぼくたちは「苦しみのラビリンス」から抜け出そうと奮闘（ふんとう）する。

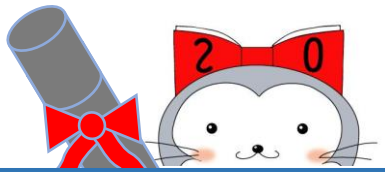
『あのころ、先生がいた。』
伊藤 比呂美／著　理論社（Y914 イ）

ひとりぼっちでも何かに夢中になれること。ことばが世界を開いてくれること。教えてくれたのは、みんな先生たちでした。
十代のとき、学校で出会った先生たち。思春期のみなさんに詩人がおくる、すてきな思い出たち。

『ぼくを探しに』
『ビッグ・オーとの出会い』
シェル・シルヴァスタイン／著　講談社（YE シ）

「なにかが足りない、それでぼくは楽しくない」。完全な球体ではない「ぼく」が、自分自身の体の一部、欠けた「かけら」を探して旅に出る『ぼくを探しに』。
その続編で、今度は「かけら」のほうが、本来自分がはまり込むべきものを探す『ビッグ・オーとの出会い』。
単純さをきわめた絵と文章で人生の深いテーマを描く、大人も楽しめる童話です。

担当者より



卒業式直前のホームルームの時間、担任の先生が生徒を集め、自作の歌をうたってくれました。
生徒たちへのはなむけでした。なかなかインパクトのある歌で、その歌詞の一部を覚えています。
メロディーが耳に残っています。そしてサビに至っては、いまでも正確に再現することができます。
感動した一方、笑いをこらえるのに必死でした。
これ以上詳しく書くと先生が特定できてしまうため、これくらいにしておきますが、とても人気のある先生でした。そして㋮にとって、一番思い出に残っている卒業シーンがこれなんです。㋮